

# 令和四年度 奈良県知事賞

## 「微かな光の中の幸せ」

奈良県立郡山高等学校 二年 佐野 七泉

私が中学二年生で学年末考査が終わった日からだった。その日から、テレビをつけると、新型コロナウイルス感染症のニュースが流れ、政治家のインタビューしか報道されなくなった。クラスターやパンデミック、緊急事態宣言など、初めて聞く言葉が多く、今までに経験したことの無いイレギュラーなマスク生活が始まった。修学旅行などの学校用事も、吹奏楽部のコンクールも、縮小や中止となり我慢しなければならないことが度々あった。多くの人の命を奪い、多くの人の涙を流させた新型コロナウイルス。やり場のない怒りを世界中の人々が抱く中で、私にできることは、この数年間から何かを学ぶことだと思った。そんな時、夏休みの課題で税の作文が出された。コロナ渦となって一年が経つ頃、当時の首相安倍晋三元総理が布マスクの一律給付を発表した。通称「アベノマスク」の製造費、管理費、配送料が税金から使われていることに賛否両論の声があったことは多くのメディアにとりあげられた。この税金の使われ方が正しかったのかは私には分からない。しかし今はそれは問題ではない。私たちが普段支払う税金が何にいくら使われているのかを知ることのできる機会となった。国民が自分たちが支払った税金の使われ方に興味、疑問をもったという事実が大切だったと思う。その後もコロナ渦の影響でオリンピックが延期となった。オリンピックを開催するにあたっての建物の建設費、その他経費に税金が使われていた為に、オリンピック延期というワードが注目された。あとを続けるように、特別定額給付金、GOTOトラベルキャンペーンなどの制度も税金を使っ

て行われているようだ。

コロナ渦となっておよそ二年と半年。多くの学生が思い描く学校生活を送ることが出来ず、たくさんの我慢をしてきた。コロナによる失業者や自殺者、多くの大人が苦しめられている中、私は今まで通り、文教及び科学振興費で教科書をもらい、勉強をしている。大きな震災に巻き込まれることも無く、復興特別所得税を支払う余裕のある親がいて、何不自由ない生活をする事ができている。私たちの身のまわりには、税金を払わないといけない状況とともに、常にどこかで税に助けられている。コロナ渦となってからの税金の使われ方を知り、一番大切なことは、「税金は払わないといけないものだ」と言って直感的に税を納めることではなく、このように自分が払った税が何のために、どのように使われているのかを知っておくことだと思う。税金を納めることによって、誰かの役に立つ。そしていつか、必ず自分に返ってくる。コロナウイルスの影響で多少の憤りを感じることもあるが、私は今幸せなのだ。そして、この環境に感謝して生きて行きたいと思えた夏であった。